

『二人禿』

昭和十六年四月四ツ橋文楽座で初演。「里げしき双草紙」として、上の巻が「濱千鳥」、下の巻が「二人禿」。作詞作曲は「西亭」こと野澤松之輔。振付の山村若榮は、人形の三代目吉田文五郎の長女で、他に「保名物狂の段」などの振付でも名を残す。舞台装置は松竹の商業演劇を一手に引き受けていた大塚克三。初演では二人の禿を、初代吉田栄三と吉田文五郎という二大名人が遣っている。同興行で「寺子屋」の松王と千代、「山の段」の大判事と定高を遣った二人が、追い出しの所作事として遣ったもの。

禿とは、廓に住み込みで修業する七、八歳から十二、三歳までの見習いの少女。姉女郎に付き従って女郎になる作法を学ぶ純粹培養のシステム。まだ廓の衰れを知らぬ年頃の無邪気さを題材に長唄「羽根の禿」など、禿を芯に据えた創作も少なくない。羽根突きや鞠唄での数え歌が定番で、島原の廓を舞台に、うららかな春景色が描かれる。

(児玉竜一)